

## 三宅秀日記（一八八八〜一九三八）

小 関 恒 雄

三宅秀（一八四八—一九三八）は明治、大正、昭和三代にわたり医育、衛生行政の中枢に居った人である。<sup>(1)</sup>この度、三宅典次氏の御好意により、彼の日記を閲覧することができたので以下紹介する。

日記は明治二十一年一月一日（一八八八）から死去（昭和十三年三月十六日）の十数日前（三月三日）までの毎日、五十年間に及ぶものである。博文館発行のいわゆる当用日記を用い、三〜四年分ずつ合冊製本し、背には（たとえば）「日記第一巻 自明治二十一年 至明治二十三年」と押してある。

全巻の構成はつぎの通りである。

- 第一巻 自明治二十一年至明治二十三年
- 第二巻 自明治二十四年至明治二十六年
- 第三巻 自明治二十七年至明治二十九年
- 第四巻 自明治三十年至明治三十三年
- 第五巻 自明治三十四年至明治三十七年
- 第六巻 自明治三十八年至明治四十一年
- 第七巻 自明治四十二年至大正元年

第八卷 自大正二年至大正五年

第九卷 自大正六年至大正九年

第十卷 自大正十年至大正十三年

第十一卷 自大正十四年至昭和三年

第十二卷 自昭和四年至昭和七年

第十三卷 自昭和八年至昭和十一年

昭和十二年（当用日記そのまま）

昭和十三年（ ）

（うち一～四巻はB6判、他はA6判）

日記は縦野で第十巻以降には頭註欄がある。記載はペン書き（一部筆書き）で、天気、出校時刻、出頭先、会合名、面会・来客者名、帰宅時刻などの順であり、その後の散策、観劇、来宅者名で終る。左端にはその日の予定・約束（会合名、場所、時刻）が記してある。記事はきわめて簡略なメモ書きであり、感想とか時局的な記述は見出されない。三宅秀の人間味は出ていないが、ただ観劇や休日の釣行に彼の素顔をわずか窺える。（とくに釣にはしばしば出掛け、月末の一覽表にまとめているほどである。）その意味では同じ医家でも『ベルツの日記』や中浜東一郎、<sup>(2)</sup>斎藤茂吉などの日記のような魅力や迫力に乏しい反面、会合や面会人のことが書かれており、当時の医界教育界の重鎮・者宿の日常が巧まず描かれて興味深く、資料としても秀れているよう。

氏のこの時期は、明治十八～二十年の欧州視察（医学教育学校衛生取調）から帰り、医科大学教授兼医科大学長ではあったものの大学改革も一応結着し、彼自身は本科生よりもむしろ別課医学科や国家医学講習科、あるいは学外の諸学協会委員会に仕事に移っていった時期である。留学組が続々帰学し新旧交代期に入り、明治二十六年（一八九三）には医科大学

教授を辞任し、同三十六年には名誉教授に推されている。また明治二十四年（一八九一）から貴族院議員に選ばれている。ここでは、主として要職にあった壮年期（とりわけ医科大学教授時代）を中心に以下抄出する。大学のほか、文部省、内務省、司法省に足を運び、中央衛生会、国政医学会、私立衛生会、順天堂医事研究会などに出席し、留学・帰朝者を送迎し葬儀に列席し、夕方は中村楼、万代軒、富士見軒、開花楼、精養軒、可否茶館、鹿鳴館、八百松などへ出掛ける日常であつた。（当字も含めできるだけ原文通りとした。「」内は著者加筆。なお註解は最少限に留めたので成書年表類の参照を乞う。）<sup>4</sup>

明治二十一年（一八八八）

〔一月一日〕

晴風邪ニテ年賀セス終日就専 佐々木。佐藤。沢田。練木。川崎。江原。山口。平野。

〔一月一五日〕

晴七時半ヨリ事務所江行き八時半開会午後二時帰宅

東京医学会発会<sup>5</sup>前八時

〔二月二八日〕

晴午前九時出校午後司法省江行き三好次官ニ裁判医学ノ事ヲ談ス 木村ヨリ電信

司法省江行ク

〔三月一三日〕

晴風九時出校ベルツスクリバ両氏ヲ名与医学会員ニ撰挙ス衛生局長ノ照会ニテ大坂府属某来ル午後三時半帰宅

〔五月七日〕

雨九時出校午後文部省江行学位ヲ受領ス六時帰宅

〔七月二一日〕、〔抄〕

朝晴午時雨八時出校磐梯山負傷者救護医員ヲ派出ノ用意ニ着手シタルモ不要トナル〔略〕十二時帰宅午後晴夕散步

〔七月二三日〕

時々□雨九時出校十二時退校後四時スクリバ(7)新橋停車場ニ送ル五時帰宅  
スクリバ出發後四時

〔二〇月一日〕、〔抄〕

別課生ニ医史ヲ開講ス

乙酉会五時富士見軒

〔二月二四日〕、〔抄〕

日本全国医会之議五時ヨリ延引 別課(8)ノ教授ヲ止ム

〔なお、一二月二五日〕「別課医学生大団結ヲ謀ル 全国医会草案会」、一二月三〇日「佐藤江行き三浦〔譚之助〕ノ事別課生団結ノ事研究会ノ事等ヲ談ス」とある。

〔二月二七日〕、〔抄〕

午時司法大臣官舎ヲ訪フ片山同伴

司法大臣官舎ヲ訪フ

明治二十二年（一八八九）

〔二月二六日〕

曇午前六時半ヨリ出校前夜ノ〔大学寄宿舎〕失火ニテ文科学学生三名医科同四名負傷シ第二年生早川庄次郎焼死ス之カ

為葬式通夜等ノ世話ヲ為シ夕五時帰宅同人之為香奠二円ヲ送り且一般被害ノ者へ役員一同ヨリ年報百分ノ一之金ヲ拠出ス

薬学会総会三時万代軒 横浜江送り延引

〔二月一日〕

朝雪八時ヨリ宮中ニ於テ御□祭ノ有ニ付参拜□□憲法発布式<sup>(9)</sup>参列午後正門外ニテ参賀四時半大学ニテ賀意ヲ表シ総員来集シ夜八時半ヨリ宮中ニ舞楽ヲ陪覧シテ十二時帰宅

此日森大臣負傷セラル<sup>(9)</sup>紀元節ニ付参賀

〔二月一日〕「森大臣葬儀午後一時青山江」

〔六月十五日〕

晴風九時出校十一時卒業証ヲ授与シ十二時写真ヲ取り三時帰宅

薬学会医科大学三時 別課卒業証授与式午前

〔九月三日〕、〔抄〕

兩午前八時ヨリ医学会開場十二時半ニ談話ヲ了ス〔略〕スクリバヲ訪フ莫鳴病院火災演習ノ為負傷者十三人生ス

〔九月二四日〕「スクリバ宇野送迎会上野精養軒 六時評議會」

〔二月一九日〕

曇雨十時出校小池来校朝押田来ル三時半帰宅

国家医学講習科ヲ公告ス午前二時間ニテ満員ス

〔二月二〇日〕「午後一時ヨリ寄宿舎清潔法ヲ議シ二時ヨリ国家医学科時間割等ヲ議シ三時ヨリ日本医学会ノ相談会ニ赴キ夕六時ヨリ〔学士送迎会〕万代軒」、二月二六日「各地方江講習生入学許可ヲ通知ス」

明治二十三年（一八九〇）

〔一月八日〕

晴十時出校午後国家医学会開講<sup>(11)</sup>午後予算會議ヲ了シ四時半帰宅

国家医学開講

（三月二八日「第一回講習科ヲ了ル」）

〔四月一日〕

晴午前九時ヨリ師範学校江赴き正午大学江出テ一時ヨリ医学会<sup>(12)</sup>発会ニ赴ク四時半閉会帰宅

高等師範学校卒業式九時〔第一回〕日本医学会始マル二時ヨリ

（四月六日「日本医学会ニ赴キ演説ヲ為シ」<sup>(12)</sup>、四月七日「日本医学会終ル」）

〔四月一九日〕、〔抄〕

晴九時出校本期ノ講義ヲ始め午後講習生ニ証書ヲ授ケ午後写真ヲ取り夕松源楼ニテ祝宴ヲ開キ夜九時帰宅長与松本実

吉来臨アリ

〔九月一日〕、〔抄〕

毎木曜医史<sup>(13)</sup>ヲ講ス

教授会一時ヨリ

〔二〇月二七日〕

快晴午前七時ヨリ浜尾氏ヲ訪ヒ竹早町江赴き十一時出校午後四時ヨリ国家医学会總會ニ臨シ夜九時半帰宅

国政医学会總會地国協会三時

〔一一月四日〕

晴九時半出校午後三時半帰宅医術開業試験委員<sup>(14)</sup>長拜命ス  
評議会ナシ

(二月三日「開業試験規則調査委員ヲ命セラルル浜尾松木佐々木長谷川大沢高木」)

明治二十四年(二八九一)

〔一月一〇日〕

晴風十時出校午後二時帰宅佐々木山県来ル  
毎土曜二年生ニ医史ヲ講ス

(四月八日「教課変更ニ付き一年生ニ医史ノ授業ヲ要セス」)

〔四月一五日〕、「医術開業試験、長崎」<sup>(14)</sup>

雨午前八時半試験場ニ行ク九時開場午後三時半閉場四時帰宅留守中小山来ル〔略〕文部大臣秘書官ヨリ本日貴族院議員ニ勅任セラレタルコトヲ通報アリ直ニ電信ヲ留守宅へ報シ浜尾氏ニ御□ヲ頼ミ其旨ヲ秘書官へ返電セリ

〔五月一一日〕、「開業試験、京都」<sup>(14)</sup>

晴朝小崎来ル八時半出校午後五時帰宅二時頃大津小唐崎丁ニ於テ魯太子遭難微創ヲ被ラルタ吉岡安藤西村斉藤沢辺清水等来訪明朝当地江行幸御出サレタリト云フ 第六号信着ス  
実地試験始マル

(欄外に「湖南事件」と朱筆あり。五月二日「帰京」)

〔九月一五日〕、「抄」

本学年ヨリ病理学ヲ火木兩日医史ヲ土曜日講ス

二年生江開講ス

(九月二日「講習科ヲ毎月曜授業ス」)

〔一〇月一五日〕、〔抄〕

夕七時半ベルツ氏江行十一時半帰宅

ベルツ氏ヨリ招き夜七時半

明治二十五年(一八九二)

〔二月二日〕、〔抄〕

每火木兩日病理学ヲ土曜日医史ヲ授業

(二月一八日「毎月曜講習科ニ授業ス」、三月二六日「医史講義ヲ了ル」、四月二一日「第三学期始マル月水金病理木医史」)

〔四月一九日〕

快晴十二時ヨリ養育院<sup>(15)</sup>江出頭三時帰宅磯来ル不逢

患者撰定養育院一時ヨリ

〔六月一〇日〕、〔抄〕

兩朝九時半ヨリ出院午後四時半ヨリ紅葉館江行ク夜十時帰宅

ベルツ氏<sup>(16)</sup>送別会紅葉館

(六月二五日「ベルツ送別会帝国ホテル七時ヨリ」、七月八日「ベルツヨリ招待夜七時」、七月九日「朝八時半ヨリ教授会江赴きベルツ江謝シ午後評議會」)

〔九月二四日〕、〔抄〕



ヒルシベルグ氏<sup>(17)</sup>歓迎会紅葉館ニテ四時ヨリ

〔一〇月末一覽表欄、<sup>(14)</sup> 医術試験日程〕

五日東京発六日名古屋発八日長崎着十二日学課分担任メ十四日問題会議十五日試験開場十六十七十八試験二十一二十  
二実地試験二四及第証授与長崎発二六神戸京都有着廿七帰京(二三日間)二九問題会議十一月二日再ヒ京都江発三日着  
四日問題会議五日試験開場六七八日試験十一十二実地試験十五日及第証授与岡山行キ〔岡山医学学校他〕十八日岡山発  
十九日帰宅

〔一二月三日〕、〔抄〕

伝染病研究所開所式一時

〔一二月五日〕

曇朝吉見佐藤来訪十時出校午後三時帰宅夜杉田来ル十時過大学婦人病室ヨリ失火シ眼科病室外表診察処□□室等ヲ焼  
失シ十二時過鎮火為ニ出校シ暁四時帰宅

教授会食四時ヨリ学士会事務所

明治二十六年(一八九三)

〔五月一三日〕

晴午後三時ヨリ上野江行ヒ絵画展覽会ヲ見午後スクリバ<sup>(18)</sup>祝宴ニ赴ク夜七時帰宅  
スクリバ祝宴上野精養軒三時ヨリ

〔六月二五日〕

朝雨午前不出午後晴博愛館病院開き<sup>(19)</sup>ニ赴ク夕五時帰宅三浦氏来診

仏教病院開院式一時ヨリ

〔八月一六日〕、〔抄〕

裁判所ヨリ召喚状到来

（八月一八日「朝八時相馬事件ニ付裁判所江出頭佐藤榎本ニ逢フ大臣官宅江礼ニ行ク」<sup>(20)</sup>

〔八月二三日〕、〔抄〕

ベルツ来着<sup>(16)</sup>ノ事ヲ聞ク

（八月二五日「朝ベルツ氏ヲ訪大学ニテ総長ニ逢」、八月二七日「朝三時ヨリ老魚釣ニ行ク東風ニテ不獵六時帰宅ベルツ氏来ル不逢山極来ル」、九月二二日「六時ヨリベルツ歓迎会江赴き九時過帰宅」）

三宅秀はこの年九月医科大学教授を辞している<sup>(21)</sup>。ただし日記にはこの件の記述が全くない。しかし九、十月までは「出校」と書いてあるのが（十一月は殆ど大学へは行かず）、十二月からは「大学へ出頭」などと書いてある。（大学へはその後も「講習科」講義のため出掛けている。）大学へは次第に足が遠くなる。大学は明治二十七年十二月三宅秀博士頌徳記念式を挙げる。（二月二日「午後大学江出頭肖像等ヲ受ク〔略〕肖像出来ニ付大学ニテ受取二時」）明治三十六年三月七日（一九〇三）には「東京帝国大学名誉教授ノ称ヲ授ケラル」。

以上、氏の四十代の日記を概観したが、簡潔そのものであり、自分の榮譽も他人事のようにそっけない。わずかに貴族院議員勅選（明二四・四・一五）の際、多少の興奮が伝わってくるのみである。

以下、大正改元（一九一三）、関東大震災（一九二三）の項のみ挙げる。

〔明治四五年七月三〇日〕

晴朝九時三浦ヲ訪問シ十時参内皇太后及兩陛下ノ御機嫌ヲ伺ヒ十一時幸□本部ヘ行き二時貴族院ヘ出テ議長カカ表□  
□弔詞ヲ述フルノ相談アリ三時半帰宅夕刻ヨリ驟雨夜ヲ徹ス〔略〕午前〇時四十三分崩御

〔七月三十一日「朝九時ヨリ参内新皇帝及皇太宮ニ拜謁シ十一時帰宅〔略〕大正ト改元アリ〕

〔大正一二年九月一日〕

晚来大雨風アリ朝理髪ヘ行ク午時過大震アリ土蔵ノ東西棟並ニ北面階上全部ヲ震落シ其他家根瓦多ク落ツ貸屋門番所  
ハ不変新宅ハ甚シカラス佐藤（駒込）ヨリ見舞番丁佐々木及勇等見舞ニ来ル神田日本橋ヘ見舞ヲ生□ス火事ノ為ニ近寄  
ルヲ得ス空シク一夜ヲ過ス夜野宿ス来□□ヲ尋ネテ来ル

最晩年になっても、貴族院議員、中央衛生会（明治一二年より）、帝国学士院会員（同一八年より）、保健衛生調査委員会  
（大正五年より）、学校衛生調査委員（同一一年より）などの現役であったが、さすがに日記は家族、親族間の誰彼のこと  
が多く書かれている。字が多少乱れてはいるがほぼ判読できる。昭和十三年三月二日（一九三八）感冒のため病床に就き、  
そのうち肺炎を併発、半月ほど臥して死去する。満八十九歳であった。

この期の日記を掲げ、結びとしたい。

〔昭和一三年三月一日〕

快晴田村ニ命シ三浦処方ノ散薬ヲ調剤セシム仁田松子来ル

〔三月二日〕

晴小雨佐藤梅□来ル 自家午後ニ到リ三十□度熱出ス三浦来□ 中村八重□来ル 仁田松子御帰

〔三月三日〕

曇小雨午前大滝来□午時中村八重佐藤□佐藤八千代

実質的には三月三日をもって日記を終る。(三月四日、九日は頭註欄にメモあるのみ。)

文献および註

- (1) 氏の履歴等は主として「三宅秀略歴」(三宅家編、孔版、一九三八)、富士川游編三宅秀先生小伝(中外医事新報一二五五号一九三八)、座談会三宅秀先生を偲ぶ夕(日本医事新報八七四号一九三九)に従った。
- (2) 丸山博 中浜東一郎日記について(鷗外と医学)覚書その6 医学史研究 三二号 三三—三八頁 一九六九
- (3) 岡田靖雄 戦前の私立精神病院長の日記から——精神科医斎藤茂吉の苦悩——医学史研究 三〇号、三三—三六頁 一九六八
- (4) たとえば、大沢謙二『燈影蟲語』一九二八、「明治医事年表」(日本医事新報一九三五年増刊号)、中野操『皇国医事大年表』一九四二、『東京帝国大学法医学教室五十三年史』一九四三、『日本科学技術史大系』二四卷医学Ⅰ一九六五、小川鼎三・酒井シヅ(校注)『松本順自伝・長与専斎自伝』一九八〇。
- (5) 本会の発端については『東京大学医学部百年史』(一九六七)参照。
- (6) 七月十五日の噴火で多数の死傷者を出す。大学からも直ちに救護に向ったが、後発隊は不要となった意か。
- (7) スクリバは明治二十一年七月より二十二年九月まで賜暇帰国している。
- (8) 別課医学科は明治十八年四月新募をやめ、廃止されることになるが、廃止に際し紛糾し、代替として全国五カ所に高等中学校医学科部がつくられ、やがてこれら五校が医学専門学校の発端となる(三宅先生昔年医談、中外医事新報七三九、七四〇号、一九一一)。
- (9) ベルツの憲法発布祝賀の有様への皮肉はあまりに有名である(『ベルツの日記』)。森が前記一月二十五日の火災のことで「学生たちと激しい衝突」をしたのが暗殺の遠因の一つであると、ベルツは述べている。なお彼は火事の日付を一月二十日としているが、これは間違いであろう。
- (10) 小関恒雄 帝国大学医科大学別課医学科第十九回、二十回卒業生名簿日本医史学雑誌 二七卷 三五九—三六一頁 一九八一

- (11) 『東大法医学教室五十三年史』四四頁。なお、三宅は「医制」を担当した。
- (12) たとえば、伊達一男『医師としての森鷗外』（一九八一）参照。なお、三宅は四月六日（か）「病理学ニ就キテ」を講演した。
- (13) 明治二十一年頃の彼の受持は「医史医学通論医学々修法」となっている（『帝国大学一覽』一八八九）。
- (14) 長与専斉に代り委員長となる。当時、試験は東京、京都（または大阪）、長崎で行われた。四月八日よりその立会のため出張したのである。
- (15) 東京都養育院と東京大学医学部との関係については『東大医学部百年史』に詳しい。
- (16) ベルツは明治二十五年九月長崎を發し、二回目の一時期帰国。翌年八月来日。
- (17) J.Hirschberg (1848—1925)。ベルリン大学眼科教授。氏の歳書を後年東京大学が入手した。
- (18) 故郷ヘッセン州より名譽教授に叙せられる（中外医事新報三一六号一八九三）。
- (19) 博愛館（仏教病院）は貧民病者治療のため、元東京大学医学部図書課掛佐藤精一郎が設立（小関、医学図書館、二七卷四号、一九八〇）。
- (20) 三宅は明治十七年十一月「華族相馬誠胤儀精神病真否鑑定之為メ東京府癲狂院へ出張右診断可致候事」と東京大学より拝命。三宅、スクリバラは「狂躁発作を有する鬱憂病」と診断した（児玉昌、東京医事新誌三〇〇〇号一九三六）。
- (21) 氏が四十五歳そこそこで辞任（依願免本官、明二六・九・九）したのは、この年の九月講座制が布かれたため（の新旧交代）であろうか。

（新潟大学医学部）

# Dr. Hiizu Miyake's Diary, 1888-1938

by

Tsuneco KOSEKI

In this paper, the author introduced Dr. Hiizu Miyake's diary kept from 1888 to 1938. Diary notes were bounded up fifteen volumes.

H. Miyake entried in concisely his official and private events in each day. He described usually on the weather, the school-going hour, offices attended at, visitors, meetings, lectures, dinner party, hour of returning home, etc.

These record are valuable especially for checking up the historical evidences in the medical field in the latter Meiji period.

Miyake was born in 1848. In 1870 he was ordered to serve on Daigaku-tōkō (medical school), the predecessor of the present University of Tokyo. Soon he was appointed teacher, and became the dean of the same school in 1881. Retiring from the university in 1893, he became emeritus professor in 1903. He was granted the degree of M.D. in 1888 and selected the member of the Upper House in 1891. He died in 1938.